万葉集抄の本文について

鍵 本 有 理

— はじめに —

『万葉集抄』は、現存最古の万葉集の注釈書である。万葉歌百六十八首を抄出し、注を施したものである。訓は一部だけに付された場合もあり、また歌だけ掲げてあって注のないものもある。しかしながら、万葉集研究において、重要な書であることはいうまでもない。

この注釈書の存在が知られるようになったのは、大正十五（一九二六）年、佐佐木信綱が『万葉集叢書』第九輯に、宮内庁書陵部蔵の『万葉集抄』を「秘府本万葉集抄」の名で紹介してからである¹。しかし近年、冷泉家時雨亭文庫蔵の『万葉集抄』が、平成六（一九九四）年、冷泉家時雨亭叢書第三十九巻『金沢文庫本万葉集巻第十八 中世万葉学』²に影印が収められ、研究が進んだ。

この冷泉家時雨亭文庫蔵の『万葉集抄』は、永仁六（一二九八）年五月十五日、藤原資経による書写である。『万葉集抄』そのものの成立および著者については未だ定説を見ないが、『袖中抄』（文治二、三（一一八六、七）年頃成立）に「万葉集抄云」などの形で引用が見られることから、これ以前にすでに成立していたと考えられる。また『後拾遺和歌集』（一〇八六年成立）の序文に影響を受けているという藤平泉の指摘³もあり、さらに作者については、後藤祥子の論⁴がある。

書陵部蔵本『万葉集抄』は江戸時代初期の写本であるが、佐佐木信綱は鎌倉時代の書写と思しき古鈔本が存在することを知っており、その古鈔本を懸命に探求したがついに見つからなかったという。その本こそが冷泉家時雨亭文庫本であり、また書陵部蔵本の親本にあたるものである。

冷泉家時雨亭文庫蔵本と書陵部蔵本を比較すると、書陵部蔵本が親本を忠実に書写しようとしていたことがわかる。すでにこの点について、また『万葉集抄』については竹下豊の解題⁵に詳しいが、ここではその解題に掲げられていない、明らかに書陵部蔵本が冷泉家時雨亭文庫蔵本を書写していたという証になる箇所を掲げる。

卷二・九五番歌の例であるが、

The Text of “Manyoshu-syo”

Yuri KAGIMOTO

得^{ユコ}取^ト本^ノる^ルと^ト見^ミ魂^ミ元^ノ利^リ

時雨亭文庫蔵本

得^エ雅^カ尔^ニ為^ス云^フ丑^ス見^ミ元^ノ利^リ

書陵部蔵本

書陵部蔵本では結句の本文を「安見元多利」としており、「元」の文字が不審である。万葉集の他の諸本はこの「元」字を「衣」としている。しかし冷泉家時雨亭文庫蔵本を見ると、この字は「衣」の草体であるが、「元」にも近い字形となっており、書陵部蔵本の誤写の理由が判明するのである。

その他書陵部蔵本は改行等も親本にほぼ揃えるなどしており、また書写態度も良好である。すでに竹下豊の解題によって指摘されているように、歌本文や注の一字を脱している例も多いが、判読しにくい冷泉家時雨亭文庫蔵本を補うものとして、非常に参考になるものである。

また、『万葉集抄』の歌本文や訓が、万葉集の現存古写本と比べて異なっているも、それを単なる独立異文として看過することのできない場合もある。

竹下豊は『万葉集抄』所収の歌の中に、巻二十の四三三三番歌と四三三三番歌が目移りにより混合されて書かれたと思われる例のあることから、『万葉集抄』の注釈作業は「おおむね『万葉集』——その本文の正確さには疑問もあるが——を傍らに置いて行われたことを示唆するものであろう」と結論づけている。またこのような二首融合のような現象から、『万葉集抄』の依拠した『万葉集』が片仮名傍訓の体裁であった可能性が高いことを指摘している。さらに、『万葉集抄』の中にある、

味酒呼^{アサカケ}三輪^{ミヅノ}之祝^ノ我^ガ忌捨^{イミシ}手触^テ之罪^ノ歎^ナ君^ノ二^ニ遇^ユ難^ナ寸^ニ (4・七二二)

この歌について竹下豊は、

第三句は、諸本「忌枚(いはふすぎ、いはひすぎ)」であるが、『万葉集抄』は「忌捨」の本文を「いはひすて」と訓み、独自の歌本文と訓ながら、両

者は照応している。元暦校本と紀州本が、「杉」の字を「捨」の草書体に近い字体で書いている例もあり、「捨」の字と間違われて、『万葉集抄』のような歌本文も通用していた可能性が、十分に考えられよう。

と述べ、『万葉集抄』が次点期の万葉集の姿を知る上でも価値の高いことを示している。

それでは、『万葉集抄』が親本とした『万葉集』はどのような本であったのか。もちろん現存写本は限られたものであり、親本そのものを断定することはできない。しかし少ない手がかりから、何らかの傾向は見いだせるのではないだろうか。

そこで本稿では、『万葉集抄』のうち、巻一から巻五の歌について、その本文を中心に検討していくこととする。なお本稿では、冷泉家時雨亭文庫蔵本に拠り『万葉集抄』の例を掲げるが、判読の困難なものについては書陵部本を参照した。また万葉集の諸本については、校本万葉集その他複製本により本文を確認した。

二 次点本との比較

まず、その成立年代から、『万葉集抄』所収の万葉歌本文・訓が次点本に近いことは当然予想できる。そこでまず次点本と比較した例をいくつか掲げておく。

① 河上^{カハ}乃湯^{カミ}都盤^ミ村^{ムラ}二^ニ草^{クサ}武^ム左^サ受^ウ常^{トコ}丹^ニ毛^モ×[×]名^ナ常^{トコ}女^メ雪^{ユキ}煮^ニ手^テ (1・二二、×は「英」に近い字を書く)

第二句「盤」は元暦校本(略称「元」、類聚古集(略称「類」、古葉略類聚鈔(略称「古」)などの諸本と同じであるが、金沢文庫本(略称「文」、温故堂本(略称「温」)では「磬」となっており、西本願寺本(略称「西」)では本文「盤」としながら右に「磬イ」と書き込みがある。

また、

② 阿佐^{アサ}里^サ須^ス流^ル阿^ア末^マ能^ネ古^コ等^ト母^モ等^ト比^ヒ波^ハ伊^イ倍^ヘ騰^ト美^ミ尔^ル之^シ良^ラ延^エ奴^ヌ有^ウ麻^マ必^ヒ等^ト能^ネ古^コ等^ト

(5・八五三)

の第一句「阿佐里須流」は類聚古集、古葉略類聚鈔、紀州本（略称「紀」）、広瀬本（略称「広」）とは一致しているが、西本願寺本、大矢本（略称「矢」）、京都大学本（略称「京」）などの仙覚本系統のものには「阿佐理須流」となっている。その他、

③ 東人之荷乃篋乃荷之緒尔毛妹情尔乘尔家留香聞（2・100）

この最後の文字、元暦校本、類聚古集は「聞」であるが、それ以外の諸本は「問」とする。書陵部蔵本は「問」に作るが、冷泉家時雨亭文庫蔵本は「聞」に近く、そうであれば、元暦校本や類聚古集と一致する。また歌の前行に記された、作者の説明部分の例であるが、

④ 皇子尊宮舍人等慟傷作哥（2・171 前行）

の最初の四文字については、

皇子尊宮 金類古西矢京（「金」は金沢本）

皇子宮 宮細（「宮」は神宮文庫本、「細」は細井本）

皇子尊 紀温

と、いずれも次点本と一致することは言うまでもない。

それでは、次点本の中でも、特に平安末期までに書写された元暦校本や類聚古集などの本文と比較してみることとする。問題となる箇所のみ、諸本との違いを掲げる。古写本については特に必要なもののみ、略称にて挙げていく。なお元暦校本は卷三を欠き、この巻の歌については比較できない。類聚古集も万葉集からの抄出であり、全歌は揃っていない。

⑤ 打麻乎麻續王泉郎有哉射等籠荷四間乃珠藻苺麻須（1・133）

白水郎 元類

泉郎 冷古（「冷」は伝冷泉為頼筆本）

⑥ 不盡嶺尔零置雪者六月十五日消去其夜布利家利（3・320）

利類
里 広紀西宮細

⑦ 玉葛實不成樹尔波千磐破神曾著常云不成樹殊尔（2・101）

磐 元類（元は右に別筆で「磐」あり）
磐 金紀古広

このように元暦校本や類聚古集と一致しない例がある。しかしながらその場合、広瀬本や伝冷泉為頼筆本と一致しているのは注目に値する。訓においても、元暦校本や類聚古集とは異なる例がある。

⑧ 河上乃伊都藻之花乃何時、来益我背子時自八方（4・491）

まず、第一句、元暦校本、類聚古集には「かはのうへの」とあり、古葉略類聚鈔も同じである。「カハカミノ」とあるのは金沢本、紀州本、広瀬本であり、この訓の一字を脱したのであろう。第五句も元暦校本、類聚古集は「ときまためやも」と訓んでおり、一致しない。「トキワカメヤモ」とあるのは金沢本などであるが、細井本（巻四は冷泉本系）に「トキワカメヤハ」、また広瀬本には「トキワカメヤハ」として「ワカ」を消して「ジケ」、「ハ」を消して「モ」としている。広瀬本は冷泉本すなわち伝冷泉為頼筆本に近い本である。

これらの元暦校本や類聚古集と一致しない例から、むしろ現存しない冷泉本系の万葉集の本文を参照していた可能性が考えられるのではないだろうか。

三 元暦校本との比較

それでは次に、元暦校本と『万葉集抄』とを比べてみることにする。

まず巻四・五三三番歌の題詞、桂本などの万葉集の古写本では、

大伴宿奈麻呂宿祢哥

また類聚古集に、

大伴宿奈麻呂宿祢一首

とあるが、元暦校本と神田本が「大伴宿祢奈麻呂宿祢哥」と衍字「祢」を入れて

いる。このように類聚古集と元暦校本が異なる場合、『万葉集抄』は元暦校本のその影響を受けておらず、元暦校本とは一致しないことが多いようである。さらに他の例で見えてみよう。

⑨ 吾者毛也安見兒得有皆人乃得難尔為云安見兒衣多利 (2・九五)

元金紀

先ほど書陵部蔵本との比較で取り上げた歌であるが、元暦校本をはじめ金沢本、紀州本が二箇所とも「兒」の字を欠く。なお元暦校本は第二句の「兒」の横に未で「兒 御本」と記す。類聚古集はこの歌を収めていない。

⑩ 吾妹兒者常世国尔住家良思昔見從変若益尔家利 (4・六五〇)

変香 元

変・ 金紀

変若 宮西

類聚古集と細井本はこの歌を欠く。また広瀬本は「変香若」とし、見せ消ちで右に「若」と記している。なお冷泉家時雨亭文庫蔵本『万葉集抄』は「見從」の右、欠損があり、ここでは書陵部蔵本により補った。

⑪ 吾背子波物莫念事之有者火尔毛水尔毛吾莫七国 (4・五〇六)

母 元金桂

毛 広

第四句「火尔毛」は元暦校本、金沢本、そして現存最古の写本である桂本では「母」となっている。類聚古集は残念ながらこの歌を収めていない。しかし広瀬本では「毛」としている。

次に訓の例であるが、

⑫ 未通女等之袖振山乃水垣之久時徒憶寸吾者 (4・五〇一)

第一句の訓、「ヲトメコカ」とあるが、万葉集の諸本では、

オトメコカ 類

ヲトメコカ 紀

ヲトメラカ 元金宮細広

オトメラカ 西温

とあり、また『和歌童蒙抄』をはじめ歌学書の類でも「ヲトメコカ」と訓んでいる。元暦校本とは異なり、類聚古集や歌学書と一致している。

しかし、元暦校本とは一致せず、冷泉本系に近いというだけでは説明のつかない例もある。

⑬ 奥幣往辺吉何麻夜妹吾漁有藻 臥束鮓 (4・六二五 第二句「吉」は「去」か)

第一句「幣」は元暦校本、紀州本などの諸本と一致し、一方金沢本、西本願寺本、広瀬本などは「幣」に作る。ただ、類聚古集がこの字の下半分を「大」のような字に書いてあり、当時の写本に判読しにくい文字の存在した可能性もある。

四 類聚古集と類似する例

『万葉集抄』の歌には、その依拠した万葉集が類聚古集と近いのではないかと思われる例がある。ここではそのようなものを掲げる。

⑭ 古之七賢人等毛欲為物者酒而有良師 (3・三四〇)

西 古宮細西温矢京

而 類紀

第五句、広瀬本は「而」と書き、○で消して右に「西歟」とする。また訓も『万葉集抄』は「ニソアル」と一部のみ書かれてあるが、この箇所、諸本が「サケニシ」とする中、類聚古集が「さけにそ」、紀州本は「サケニ」(「シ」なし)、広瀬本は「サケニソ」として「ソ」を見せ消ちで「シ」と直している。元暦校本は卷三を欠き、比較できないのが残念であるが、類聚古集や広瀬本に近いと考えら

れる例である。

⑮夏野吉牡鹿乃角乃束間毛妹心乎忘而念哉ナツノユキツカシカノツノノ、ツノノマユモイモカガ、コシトモモヘ (4・五〇二)

第一句の「吉」(旧字体のため上が「土」)は、書陵部蔵本では「去」の草体に近いが、冷泉家時雨亭文庫蔵本で見える限りは四画目からは「土」と離れており、「吉」と見ることができるとして諸本「去」とする中で、類が「吉」とし、墨で消して右に「去」を書いているのは注目される。先ほど掲げた例⑬巻四・六二五番歌の第二句の「去」も「吉」に近く、迷うところであるが、何か共通の祖本が存在した可能性も考えられる。

なお、書陵部蔵本は冷泉家時雨亭文庫蔵本の忠実な写本といわれているが「而」を脱している。このように一字を脱した例は他にもあること、すでに竹下豊の解題等に詳しい。

⑯鳥梅能波奈伊麻佐加利奈利毛、等利乃已惠能古保志积波流岐多流良斯ウメノハナイマサカリナリモ、トリノコエノコホシキハルキタルラシ (5・八三四)

「毛、等利乃」とするのは類聚古集だけで、紀州本以下、広瀬本も「毛、等利能」とする。

また、類聚古集の独立異文であるが、『万葉集抄』と関連づけられる例がある。巻五・八七六の前行、『万葉集抄』では、

⑰書殿饒酒月哥

とその作歌事情を記している。万葉集の諸本は、題詞に「書殿饒酒日倭歌四首」としており、「日」を「月」とする点、不審である。

しかし類聚古集にはこの字を「明」のように記しており、偏の「日」はかなり小さく「口」に近い。この例からやはり類聚古集との近さが推測される。

五 独立異文の例

『万葉集抄』の本文について、竹下豊は解題で「親本に問題があったのではな

いかと推定される箇所がある」と指摘し、特に巻十二・三〇七〇の注、

ユフトハ木名也。花ノイミジクテケ [] ソレヲトリテタ、ムヲユフタ、ミトハ云也。

について、このままでは意味が通らず、「空白は親本の欠字をその字数分だけ空けて書写したためであろう」と述べている。また「歌本文の漢字が一字あるいは二字程度脱落している例は甚だ多い。」とも述べている。

しかしながら、『万葉集抄』の独立異文には、そのような親本の問題や誤写の可能性以外の要因が考えられるものがある。例えば、すでに指摘のあるものとして、

石戸破手力雄毛得手鈍弱寸女有者為便乃不知苦イソトワケテカガワニモエテアシカガフヤメナレハスヘハシジツナクニ (3・四一九)

は、類聚古集に、

座石戸破手力刀毛欲得手弱寸女有者為便乃不知苦

いはとわるたちからをのもえてしかなたをやめなれはすへもしらなく

などであるのに比べると、『万葉集抄』は歌本文に「雄」「鈍」と他の古写本にはない文字があり、訓も「イハトヤフル」とあるなど一見不審である。この歌を例に挙げて竹下豊は、第二句から四句の訓は古葉略類聚鈔と一致しており、また結句が『和歌童蒙抄』と近いことから、むしろ訓は「当代の万葉の訓みの枠におさまっているのである」としている。そして本文はその訓に合わせて変更されたと考えられるのである。なお童蒙抄との訓の近さは先に⑫の巻四・五〇一番歌の例でも指摘した。

次の例も訓に合わせた本文改変に相当するだろう。

⑱古之人之食有吉備能酒痛者為便無貫寶賜牟コノメセルキヒヒノサケヤシキトスヘナメキスダマハン (5・五五四 五文字目「食」の左上に「ン」のような字あり。第五句の訓は左に付す)

この歌、諸本には「古人乃令食有……」とあり、訓「イニシヘノヒトノ……」にひかれた「意改」と考えられる。

万葉集の本文がその書写者によって恣意的に改められる「意改」については、木下正俊の論をはじめとして多くの指摘がある。

なおこの歌、元暦校本は第四句「痛」を「病」とし右に「痛イ」と書き込みが

ある。類聚古集や紀州本は「病」に作る。

⑮無暇人之眉根乎徒尔令搔乍不相妹可聞 (4・五六二)

諸本は第三句の「尔」字がなく、また、この歌は類聚古集には収められていない。やはり訓にひかれた意改であろう。

なお書陵部蔵本では第二句の「之」を欠き、また第四句の「令」を脱し右に小字で書いている。忠実な写本とはいえず、このような例からやはり冷泉家時雨亭文庫蔵本の本文を尊重する必要がある。

⑯玉葛實不成樹尔波千磐破神曾著常云不成樹殊尔 (2・一〇一)

先にも挙げた歌だが、第五句「殊」は他の写本では「別」となっており、『万葉集抄』の独立異文である。

また歌本文ではないが、

⑰幸于紀伊国時河嶋皇子御作哥 (1・三四 前行)

諸本では「川嶋皇子」となっている。またこのあと、巻二の一〇〇番歌の前行でも「石河郎女」と、諸本が題詞において「石川」としているところを「河」としており、書写者の書き癖と見ることできる。しかしこの三四番歌の場合、広瀬本は題詞の上に「河嶋」とあり、その右下に「天智天皇第二皇子」とある。また伝冷泉為頼筆本にも題詞の上方に「天智天皇第二皇女河嶋」とある。本文ではないが、やはり冷泉家本系との関わりを示唆するものと見ることできるのではないか。

六 結び

万葉集の次点本として全二十巻が揃っているのは現存諸本の中でも広瀬本のみであり、また『万葉集抄』そのものも写本でしか存在しないため、『万葉集抄』所収の歌について、次点本だけで説明することは困難である。しかしながら、次点

本の中でも類聚古集や伝冷泉為頼筆本などとの近さを垣間見ることはできたと考える。

万葉集の古写本はその巻によって性質が異なるものも多く、今後は他の巻の『万葉集抄』の本文と他の古写本を比較し、さらに検討を加えることを課題としたい。

本論では特に触れなかったが、万葉集の巻十七には書写の間に生じたとは思われない異同があるなど、万葉集の原本・本文は唯一無二のものであったとは言えない可能性も言われている。

万葉集の原本が存在しない現在、『万葉集抄』をはじめ、仙覚以前の注釈書や歌学書の古写本を研究することはこれからも必要であろう。

〔注〕

- (1) 佐佐木信綱『秘府本万葉集抄』一九二六年七月、古今書院。
- (2) 一九九四年十月、朝日新聞社。
- (3) 「宮内庁書陵部蔵『万葉集抄』について」(『古典論叢』第十八号、一九八七年八月)。このほか、浅田徹「秘府本万葉集抄について」(『和歌文学研究』第五十九号、一九八九年十一月)などの論もある。
- (4) 『秘府本万葉集抄』の作者」(『国文目白』第二十五号、一九八六年二月)。
- (5) 冷泉家時雨亭叢書第三十九卷『金沢文庫本万葉集卷第十八 中世万葉集』一九九四年十月、朝日新聞社。
- (6) 「平安後期の万葉研究―『万葉集抄』をめぐって―」(『講座平安文学論究』第十輯)一九九四年十二月、風間書房。
- (7) 注6に同じ、四〇頁。
- (8) 古写本の確認として、以下の本を参照した。
『桂本万葉集』日本名筆選27 一九九四年十月、二玄社。
『元暦校本万葉集』第一―四冊 一九八六年六月、勉誠社。
『類聚古集』縮刷新版、一九九二年七月、臨川書店。
- (9) 注5に同じ、一七―一八頁。
- (10) 注5に同じ、一八頁。
- (11) 注6に同じ、四〇―四二頁。注5の時雨亭文庫蔵本の解題、二二頁でも歌番号を挙げて同様の指摘をしている。
- (12) 「万葉集写本の意改」(『文学』第四十二巻二号、一九八〇年二月)など。